

母子関係の諸相（1）

鯨 岡 峻*

Takashi KUJIRAOKA

Some Aspects of Mother-Child Relationship (1)

序

筆者は先の論稿「おとなから見た子どもⅠ、Ⅱ」^{註1}において、次の論点を明らかにした。

1. 従来の発達心理学の個体主義的、機能分析主義的アプローチは、子どもを諸能力の集合体と考え、それらの諸能力がいかにか自体的に展開、完成していくかをもって子どもの発達とみなす。しかし、子どもを全体として捉えるためには、そのようなアプローチを括弧に入れ、まずもって子どもの生活世界に還帰しなければならない。
2. そのようなアプローチは、研究主体の上空飛翔性、透明性を暗黙の前提としているが、子どもが相対的に閉じた対象（Gegenstand）とみなされたり、研究主体が無化されたりするのは、一つの抽象化された条件下においてでしかない。
3. 従って、一見無関係を装った透明な観察主体が、あたかも事物を記述するがごとく、閉じた個体としての子どもを記述しようするのは、何らかの課題——応答場面における子どもの行動のみであるが、しかしそれをもって子どもの生活世界全体を等置するところに今日の発達心理学は成り立っている。
4. そのような還元主義的な立場を括弧に入れて子どもの生活世界に赴くとき、子どもはなによりもまずおとなとの関係の中に生きる存在であること、言い換えれば、子どもの生活世界にはおとなが本質的な影を落としていることを見ないわけにはゆかない。

以上は、メルロ＝ポンティの諸著作ならびにソルボンヌ講義録^{註2}に触発されて開かれたパースペクティブであるが、このパースペクティブから切り出された「おとなとの関係のなかの子ども」という視点を具体化していく作業が残されている。

子どもの生活世界は、物理的環境をどう操作していくかというような、物への具体的な関係からのみなるのではなく、むしろ他者との関係をその本質的な部分として抱えている。最近の新生児、乳児研究が明らかにしたように^{註3}、たしかに人間の赤ん坊は従来考えられているよりもはるかに有能な生活体であるが、個としては生存しえないという意味では、全く無力で、他者を絶対的な意味において必要としていることに変わりはない。たとえば最初、快、不快の表出というグローバルな情動であったものが、嫉妬やへつらいのような複雑な情動へ分化していくのは、決して赤ん坊一人によってできることではない。他者との関係の中で、子どもは自分の欲望が満たされたいと願い、満たされない欲望を不満というかたちでおとなにぶつけ、あるいはおとなの欲望に従うために自らの欲望を放棄しながら、様々な感情を経験していくのである。他者との関係を通じてなされるそのような感情的生活は、子どもの生活世界の中では周知的でも第二義的でもない。

子どもの成長がおとなのかかわりの中で、それも欲望の場の中でなされるという自明の、しかし従来の発達心理学においてはあくまで背景としておいておかれた問題に照明をあてるとき、一見したところ「個体の諸能力の自己展開」ともみえる子どもの発達過程は、実際にはおとなからの働きかけを本質的な部分として含む過程であることがわかる。しかも、「おとなから見た子ども、Ⅱ」でみたように「おとな」という概念自体決して静態的、完成的なものではない。おとなは、子どもの発達の延長上であって自らのいわば「発達課題」を内に含む存在であるからには^{註4}、子ども——おとなの関係は後者が前者に働きかけるという一方通行的なものではありえない。おとなは自らのうちにかつて子どもであったことの残滓をとどめ、また子どもはおとなを先取りしている^{註5}という点で、子ども—おとなの関係は本質的に両義的、両向的な関係であり、その関係から生まれた一つの出来事は、子ども、おとなそれぞれにはおねえって、次なる

* 島根大学教育学部教育心理学研究室

関係へと引き継がれていかずにはおれない。

今、発達を「完態に向かつての定向進化」とみる枠組をはずして、個体の誕生から死までを一つの発達のプロセスとみると、子どもと親は互いに相同的な発達のプロセスの異なる位相において関係をもっていることがわかる。親は自らがどのようなプロセスをたどって今日に至っているかによって、換言すれば、先行するそれぞれの位相で何を自らの人格のうちに沈澱させてきたかによって、また発達過程のそのような位相に課せられた「発達課題」を自らがどのように身に引き受けていくかによって、子どもに様々な働きかけをしていくことだろう。そして、おとなの働きかけの相異（つまりおとなの人格の相異）が、子どもの気質、体質などの諸傾性を媒介しながら、結局のところ子どもの個性につながっていくのである。

翻って考えるに、従来の発達心理学は知能の相異という次元を除けば、おとなの働きかけを含みこんだ子どもの個性化の問題に十分照明をあててこなかったとさえいってもよい。そのような個性化の問題は子どもの発達一般にみられる普遍的な誤差に還元されてきたのである。たとえば、「個々の子どもが育つ環境は様々であるにもかかわらず、種に固有の行動出現時期がある」と。このように考えたからこそ、発達心理学は個体発生過程に働く遺伝因子、成熟因子を浮き彫りにすることができたのかもしれない。しかしながら、この議論は暗黙のうちにおとなの心理的な働きかけ、家族内の力動関係や文化環境といった諸要因をいわば誤差とみる視点を打ちだしている点を見落してはならない。そこでは、種に固有の行動出現の事実を発達の中核的な問題として捉えようという、研究主体の暗黙の価値観が働いているのである。

これに対して筆者は現象学のスローガン「事象そのものへ」を「子どもの生活世界へ」と読みかえることによって、これまでの発達研究が看過してきたおとなとの関係性にもっと照明をあてる必要を痛感するようになった。それともう一つ、ちょうど西欧的人間観がいわゆる未開文化に接触することによってカルチュアショックを受け、人間性の何たるかに一種の現象学的還元をせまられたように、発達心理学もまた発達障害児に接することによって、その理論的枠組にいわば発達論的還元をせまられるように見える。いわゆる未開人がユマニテの基底を見せてくれるというのが真実であるのと同じ意味で、発達につまずきを見せる子どもは、そのつまずきによって、発達におとなのかかわりがどのような意味をもつかを開示してくれるのである。

折しも筆者は一昨年頃から、発達相談や教育相談、そ

の他において、発達につまずきのある子どもとその母親に接する機会を持つようになった。ケースによってその《つまずき》の内容はいろいろであるが、そこで痛切に感じるのとは子どもとその母親との関係性である。訴えられるのは確かに子どもの行動上の問題（夜尿、チック夜驚、のような比較的一過性のもので、吃音、知恵遅れ、言葉が出ないことなど療育が長期に亘るものまで）である。しかし、母子の関係をみてまず気づくことは、持ちだされて来た行動上の問題もさることながら、母親に心理的な葛藤が強くあるという事実である。母親の気持の中の葛藤が（それが、一次的なものであれ、子供の器質的障害からくる二次的なものであれ）、子どもに対する育児態度となってあらわれている。しかも母子の関係は対等な二者関係ではなく、子どもは絶対的な意味で母親を必要としているから、母親の心理的葛藤が子どもの中に強く反映されてこざるをえない。その点を踏まえていえば、母親が子どもの志向を汲み取れていない、あるいは本質的には同じことだが、子どもの気持を読んで感じ取ったものを素直に子どもに返していかないという印象を受ける。こういう物の言い方に対しては、直ちに従来の発達研究の枠内から、「印象発言にすぎない、根拠を示せ」「母親を不当に非難するだけだ」という非難が返ってこようし、臨床の現場からは、「母子関係をいくらいじっても、子どもの問題行動は改善されない」といった反論がでてこよう。そのようなこれまでの母子関係研究や発達臨床研究に内在する諸問題については、別の機会に詳しく検討するとして、本稿では、子どもの発達の力動的な過程におとなの働きかけが本質的に重要な意味をもつことを明示するために、母親の欲望の領野を経由しつつ、母親が子どもにかかわるなかで感じるであろう諸々の心的葛藤を詳しくみておくことにしたい。

I 母親の子どもへのかかわりを規定しているもの

子どもの成長過程の各時間切片の中で、母親は子どもに対していろいろなかかわりをもつ。子どもの喃語に自分の赤ちゃん言葉をからめていたり、離乳食を食べさせながらいろいろ話しかけたり、抱いてあやしたり、叱ったり……そのかかわりは子どもの側に何らかの反応をひきおこさないわけにはいかないし、そのような行動としての働きかけは常に何らかの情動を伴わずにはいない。

子どもが発達するというのは決して子ども一人ですることではないこと、これは少くとも乳幼児期の母子関係を見れば何人も否定しがたい事実である。そして母子の

かかわりの場に数多く立ち合ってみると、そのかかわり方がいかに多様であるかもわかる。このかかわり方の多様性にもかかわらず、普通の子どもの発達に種に固有の順序性とテンポでなされていくという事実は何を意味しているだろうか。この事実を、「子どもの成長を規定しているのは成熟要因であって、環境は副次的でしかない」と読むことも確かにできよう。しかし、そのかかわり方のみかけの多様性にもかかわらず、そこには何か共通したもの、通常のかかわりの中には必ず含まれているものがあって、それが子どもの発達のテンポと順序性を規定していると考えられないわけではない。発達につまずきの原因は前者のように読めばおそらく遺伝、成熟要因に求められようし、後者のように読めば、かかわりの中にその重要な要因がかけていたケースとして考える余地が残されることになる。

実際、発達につまずきのある子どもの臨床場面に幾度となく立ち合ってみると、医学的所見は何ら発見されないにもかかわらず、何らかの発達につまずきを「症状」として呈する子どもたちに数多く出会う。その中には、母親の子どもへのかかわりが一見してゆがんでいると思われるケースが少なくない。我々はそのような臨床的経験から、子どもは一個の閉じた個体として自らの能力を自己展開していくというような発達観を、少くとも乳幼児期の子どものに関しては確信をもって否定することができる。そして、それらの子どもをみると、子どもの発達に親のかかわり方が重要な意味をもつということを認めざるをえない。しかしそれにしても、子どもがその発達過程でつまずくのはどうしてだろうか、それを解明するために、我々は母親の子どもへのかかわりの背景あるいはその源泉としての、母親の欲望のありようか見ておかねばならない。

1. 欲望を抱く存在としての母親

人は一般に「母親」という言葉に深く思い入れをしている。現実の母親像はともかく、自分の胸のうちに生きる母親像は一般的に言えば、優しく自己犠牲的で、子どもに献身的で、何でも受け入れてくれる温かい存在といふうにイメージされていることだろう。しかし、現実に生きる母親は決してそのイメージどおりではないし、まして母親の欲望の領野は平坦なものではない。H・ドイッチェ註⁶⁾はその著「Psychology of Women」の中で若い頃から老年に至るまでの人生の諸相における女性的葛藤を、臨床ケースをあげながらとりあげている。そこでそれを参照しながら、また最近筆者がかかわりを

もった発達相談の経験を念頭におきながら、母親が子どもという存在を前にしてもつ様々な欲望や葛藤をみておくことにしよう。

《妊娠の事実》

欲望を抱く存在としての母親が抱える葛藤は、子どもの誕生以前からある。母親の妊娠は一般的には喜ばしい出来事のはずである。多くの場合、大いなる喜びをもって迎えられることだろう。しかしそこに葛藤がないわけではない。未婚の母のように妊娠が必ずしも望まれたものではなかったり、あるいは夫を自分の手元にひきとめておくためのものであったり、夫に失望し離婚を考えはじめた矢先の予定外のものであったり、というケースは決して少く日い。またそれほどまでにネガティブではなくても、もう少し二人だけの生活を楽しみたかったとか、身軽な間に海外旅行をしたかったとか、仕事をもう少し続けてその方面での自己実現をはかりたかったとかいった「独り身」時代への惜別の情が、「妊娠」という事実と直面することによって強く喚起され、妊娠を喜びながらもその裏で、その事実から逃れたいという気持ちが湧きおこってくるようなケースもある。父親になる者の側でも多かれ少かれ似たような葛藤が抱え込まれることになるが、母親になる人の側にはそれに加えて、子どもは無事に生まれてくるかどうか、出産時の苦痛はどうか、親が自分の世話をしてくれるかどうか、出産後の職場復帰はどうか、等々、いろいろなことを今から気遣わねばならない。

要するに、妊娠の事実を前に、母親となる女性は、対夫、対自分との関係の中で、願望がついえるという水準での葛藤から、現実から起ってくる出来事がもたらす葛藤や不安まで、実に様々な葛藤を経験することになる。いいかえれば、自らの個体史の延長上に妊娠の事実がすんなり位置づけられるかという個体レベルでの葛藤と、家庭内力動のレベルでの葛藤とが、生起しうる。そして、子どもはそのような夫婦の微妙な感情の場、いろいろな思いが渦巻く場のなかに生まれる。妊娠期間というのは、これから母親、父親になる人がそのような葛藤に直面しながら、全体としてはその葛藤をのりこえ、新しく生まれてくる子どもとその後の生活のために心の準備をする時期であるが、しかし一般には、そうした葛藤ののりこえられないままに子どもが誕生してくることになる。

《子どもの誕生後》

子どもは上に述べたような期待と不安の入り混じった場に生まれてくる。子どもの誕生は当然最大の祝福をも

って迎えられるはずのものであるが、しかし残念ながらどの家庭に於いてもそうだとは限らない。生物学的に母親や父親となった人が、以下に述べるようにいまだ心理的に未熟であるというところから生じてくる諸問題、あるいは母親の産褥からの回復の遅れにともなって生じてくる諸問題などのため、母親がゆとりをもって子どもにかかわってゆけないようなケースが生まれてくる。具体的に述べよう。

《夫婦の関係性の再体制化に伴う葛藤》

一つには、子どもの誕生がそれまでの夫婦の二人きりの生活に再体制化をせまるものであるという、避けて通ることのできない問題がある。哲学者ヘーゲルは「子どもの誕生は夫婦の愛の結論であると同時にその死である」と言い、さらに「生まれた子どもは、夫婦のそれまでの関係を変容させずにはおかない第三者である」と述べている^{註7}。実際、「子供っぽい夫と姉さん女房」という関係でうまく歯車が噛み合っていた夫婦の場合、子どもの誕生はこれまでのこうした関係に変容をせまらずにはおれない。もちろん良い方向に転じた場合には、その夫は子どもの誕生を機に、責任を自覚した一個の自立した男性として精神的に成長することだろうし、それによって3人での新しい生活スタイルを確立していくことだろう。だが、必ずしもそうとばかりは限らない。精神的に未熟なままの夫は子どもに妻をとられたような気分になり、子どもに嫉妬して他の甘えられる存在の方を向きはじめることになって、夫婦関係そのものが破綻をきたすということも起りうる。万一後者のケースになった場合、母親は初めての子育てを苦悩と不安の入りまじった気持で行なわなければならない。そしてその入り乱れ屈折した気持は、ある場合には、この子だけは男らしい男になって欲しい（なぜなら夫は甘えん坊で男らしくないから）とか、母親思いのよい子になって欲しい（なぜなら夫の気持はもはや自分のところにはないから）とか、将来ひとかどの人物になってほしい（なぜなら夫はつまらぬ人間だから）という強い願望や期待になりかわって、それらが我が子に投射されるということも起ってこよう。

あるいは妻が年齢の離れた夫に甘えるという関係で成立していたカップルの場合、その若い母親は自分の子どもを自分自身の母親（つまり祖母）にまかせきって、自分は気持の上では我が子の姉となるというケースもめずらしくないといわれている。

要するに、子どもの誕生は家庭に人間が一人増えたという以上の意味をもち、夫婦の間に全く新しい体制をつ

くりあげるようにせまる。それはその若い母親、父親自身のライフサイクルにおける一つの危機（クライシス）^{註8}であると共に、心理的に母親父親にならねばならないという、その人自身の発達の問題でもあるわけなのだが、とりわけ母親は新しく始まる育児と産褥からの回復という課題の中で、この危機と自らの「発達課題」とを迎えなければならない。産褥直後は一般的にいてもホルモンバランスの崩れた身体精神的に不安定な時期で、現実に様々な葛藤をかかえていたり、とりわけ無意識のうち心的コンプレックスをかかえていたりする母親の場合、一過性産褥期精神病状態がかなり長びく場合もあるといわれている。

《悪循環の始まり》

こうしたいわば構造的危機ともいえる葛藤の後にも、母親の内にいろいろなタイプの葛藤が生じうる。たとえば、誕生後3ヶ月をすぎて、子どもが脳幹機能による生命維持機構に支配されていた生活から、皮質機能に依拠した真に人間的な生活へ移行するにつれ、子育ては情意的なやりとりがはじまることによって楽しい思いをすることが増える反面、赤ん坊の側に「意図」や「つもり」が生じて母親の思い通りに育てにくくなるという面もでてくる。とりわけ、ミルクを飲まない——飲ませようとあせる——さらに飲まなくなる、という悪循環や、夜泣きする——昼寝する——夜泣きするの悪循環などは核家族の新米ママを疲弊させ、育児ノイローゼを導く。その発端は何なのかについては諸家によって説が分かれる。精神分析学のように、母親の無意識に潜んでいる子どもへの拒否的感情（私は本当はこの子を望んで産んだのではないとか、私は自分の親からこのように可愛がられた思い出はない、といった自分の幼少期のコンプレックスなどに端を発する感情）が育児不安を産み、それが微妙に子どもに伝わって、子どもの側に「受け入れられていない」という漠然とした観念が作りあげられるからだと考える向きもある。またメラニー・クラインのように、子どもの幻想世界を中心にその悪循環の可能性を考える向きもある^{註9}。

さて、悪循環からくる育児ノイローゼも結局そうなのだが、母親が子どもとの間で葛藤を抱くのは、要するに自分の思い通りにしたいという母親の気持が満たされないからである。たとえば、母親の側が柔軟性に欠けていて、自分のスケジュール通りに事を運ばねば気がすまないと思っているところで、子どもが自分の思い通り動いてくれないとか、あるいは夫が自分の期待しているように自分を支えてくれない等々。これらは、いうまでもな

くどの母親にも程度の差こそあれ生じてくる問題である。従って育児の過程にトラブルはつきものであり、育児に悩まない母親などいないといっても過言ではない。では、それが子どもの成長に足かせをはめるほどにまでなるのは、どんな場合だろうか。ここで我々は、ウィニコットの「good enough mother」の概念^{註10}を参照しておく必要がある。

ウィニコットは「完全無欠の母親」は決して子どもにとって良い母親ではなく、good enough な母親でなければならないという。ここで彼は、good enoughであればよく、perfectであればなおよいといっているのではない点に注意しよう。つまり「子どもの欲求や思いを全て満たしてやる母親は決して良い母親なのではなく、むしろ時には子どもが満たされなかったり、受け入れられなかったりの経験をもつことが大切で、ただ受け入れられ、満たされるのが基調になり優勢になることが必要だ」これが good enough mother の内容である。このとき母親は子どもに傾倒しているともウィニコットは言っている。要するに、これを子どもの側から見れば、子どもは自分にとって最も大切な人（母親）に基本的な信頼を寄せながらも時に不信を感じることもあるが、多くの場合全体としては基本的な信頼感を形成していく、ということである。これに対して、不幸にして good enough なかかわりが得られなかったとき、乳児は幻想の中で迫害されていると感じ、世界に対してまた自己に対して基本的不信を形づくらざるをえない。これをエリクソンが乳児期の「基本的信頼対不信」の危機^{註11}というかたちで言い表わしていることは周知のとおりである。

我々は今、精神分析的思考に依拠しながら、母子の関係がつまり歯車が噛み合わなくなる可能性を、「子どもの誕生間もない頃に生じる母親の心的葛藤とそれに伴う微妙な子どもへのかかわりの歪みが、子どもの幻想界に諸々の波紋をひきおこす」というかたちで考えようとしている。というのも、我々は臨床の場において母子の関係が歪みはじめるその端緒に立ちあうことは基本的にありえないからである。通常我々が関係の偏奇した母子に出会うのは子どもが3、4才になってからであり、したがって、その関係の偏奇は、関係のつまりの発端から数年間の母子の生活を沈鬱させたものだということになる。こうして我々はこの母子の過去を再構成するようにせまられるが、しかし初回面接における母親の証言からその過去が明示的に再構成されるということはまずない。授乳パターンはどうだったか、赤ん坊の頃の様子はどうかの事実情報は、手がかりにはなっても、関

係のつまりの端緒を明示してくれるものではないのである。しかも母親の記憶の中の「事実」は母親の防衛機制によって色づけられている可能性が多分にある。もちろんこれは母親を悪者にするつもりで言っているのではない。「原因は何か」を過去に向かって問えば、それは悪無限的に進行するだけである。ただ、我々は臨床の場を通して、発達につまりのある子どもが再び元気になっていくことと、母親の子どもへのかかわりがまず変化し、母子を支える家族内力動関係が全体として変化していくこととは、相即するという事実を知っている。そして行動上のかかわりの変化は、それまで母親が子どもを気持の上でどのように受けとめていたかについての洞察を、つまりまずその心的次元での受けとめ方の変化を必要とする。我々が今、母親の欲望の領野、幻想の領野を経由しようとしているのはまさにそのためである。

《母子分離の始まる頃》

さて、このような構造的危機がのりこえられ、無我夢中の育児から解放されてホッと一息つけるようになって、母親が自分の周囲をながめるようになると、それまでの疾風怒濤の毎日の生活の中で棚上げにされていた諸々の欲望が再び顔を出してくる。とりわけ子どもの誕生後に、夫婦間に溝が出来てしまったような不幸なケースでは、母親の愛情欲求が子どもにすべて投射されて、かわりすぎというかたちの子どもの依存に置きかえられていくことがしばしばある。「夫のことはあきらめましたでもこの子だけは立派になって欲しいと思う」。そのような言葉を耳にすると、我々は改めて父親の重い役割に気づく。とりわけ、母親自身の幼少期のポジティブ・ネガティブな父親コンプレックスが対夫との感情的関係の中で一挙に噴出し（「自分の父親は私をちっとも可愛がってくれなかったが、やはりあなたも」「自分の父親は私をあれほどまでに可愛がってくれたのに、あなたは」というようなかたちで）、しかも自分一人で子どもを背負わねばならないという思いを母親が強く持つような場合、その葛藤が子どもに屈折したかたちで投げかけられていくことが予想できる。

とりわけ子どもがある程度大きくなって、子ども自身の欲望の主体になりはじめる頃になると、子どもとの同盟関係に生き甲斐を見出していた母親は、子どもに対して両面的な気持を抱かざるをえなくなる。つまり、「いつでも自分の思い通りに動いてくれる子であって欲しい」という気持と、「立派な子になるためには早く自立してくれなくてはこまる」という気持との間に生じる葛藤である。子どもの側からみると母親主導型の育児態度の

下、何でも「こうしなさい、ああしなさい」という形で育てられてきたのが、突然、私の言うとおりに自立しなさい(つまり母親の思い通りになるな)という矛盾命題をつきつけられることになってしまう。これはベイトソンのいう二重拘束状況^{註12}であるが、この時期には母親の欲望の布置との関連で、二重拘束状況が生まれやすい。たとえば、次のような例がある。母親は自分の両親から厳しく躰られて育ち、どちらかといえばキッチンとした生活態度で生きてきた。それは自分の育児態度にも反映され、かなりきちんとした授乳スケジュールの下に子どもを育て、子どももそれを受け入れて乳児期はそれで結構うまくやれた。ところが子どもが3才頃になって自分を強く主張するようになると、幼少期の強い自己主張が親の高圧的な態度の下に押し込まれたというこの母親自身のコンプレックスが賦活され、一方では自分の子どもへの同一化から子どもが(自分のように)もっと自己主張的、自立的であって欲しいと願う反面、自分の親への同一化から(そしてこの母親の日常の育児態度はそれを反映したものであるわけだが)、やはり厳しく子どもを抑え込んでいかざるをえない。こういう風にして母親はアンビバレントなかかわりをしていかざるをえないが、この母親の無意識の両価的態度は、子どもに通じ、子どもは時に自己主張的に、また時に従順になる。しかしこうした子どもの態度は、どのみち母親を満足させることはできない。これなどは母親のコンプレックスに端を發して母子の関係がゆがんでいく一つの典型的なパターンといえる。

あるいは、夫への失望が元になって子どもとの共生的関係が強められるという先に触れたような事態の場合も、子どもが自立の様相を強めてくると、母親の無意識の願望と対立してしまう結果になる。有名なフロイトの「ハンスの症例」^{註13}はフロイトの解釈では、エディプス期にあるハンスが父親の去勢の威嚇によって父親を恐怖し、それが馬恐怖へと置き換えられたケースであるという。しかし、M・マノーニは「症状と言葉」^{註14}の中で、これは母親の欲望の布置にとり込まれた子どもの不幸であるという。つまり、夫にすっかり失望し、男はもうこりごりと思っている母親にとって、ハンスはいつまでもかわいい男の子であって欲しい。ところがハンスが成長し、性的なものに興味関心を示すようになると、母親はそのように男性になってゆく(つまり夫のようになってゆく)ハンスを認めることができず、いつまでもかわいい男の子でいて欲しいという自分の無意識の願望にハンスをゆだねようとする。それゆえ「ママにもオチンチンがあるの?」というハンスの問いに対して、「オチ

ンチン」を性器とは認めず、あくまで排泄器としてみたいがゆえに、「ええ、あるわよ」と答えざるをえない。マノーニによれば、おとなの偽瞞的な言辭によってハンスの性目標が混乱してしまった点が最も大きいのであって、この症例は家族(夫婦)のかかえている病因が子どもを通じて噴出してきた家族病理のケースであるという。事実、ハンスの両親はまもなく離婚している。

器質的欠陥が明確ではない小児自閉症や児童精神病様の諸症状がすべてこのような母子関係のゆがみや家族病理に帰着するかどうかは定かでない。しかしながら、恐怖症や神経症性の発達のつまずきは、結局のところ子どもの発達の場に参与するおとなたちの欲望の布置に、子どもがきっちり収まりきれないというところに端を發しているように思われる。我々は誕生から数年の間に母親が抱える様々な欲望と、その挫折から来る様々な苦悩や葛藤を見てきた。子どもが幼稚園期、児童期、青年期になるに従って、母親の抱える葛藤も変容していくが、まずさしあたっては幼い子どもの発達の場が、母親をはじめとして周囲にいるおとなたちの欲望の場と重なりあうことを、ここで確認できれば十分である。

2. 文化規範の崩壊と今日の困難な育児状況

これまでみてきたような母親の心的葛藤は、人が人と関係を取り結びながら生きるという情況に不可避的なものだといっても過言ではない。どの家庭でも多かれ少かれ母親はそのような葛藤をいだし、また父親もその家庭の中の位置と役割に応じて何らかの葛藤を抱かずにはおれない。そして子どももそのようなおとな達の欲望の渦中にまきこまれないわけにはいかない。どの家庭でも何らかのレベルでの家庭劇が演じられるのであって、ただ多くの家庭では自覚的かそうでないかはともかく、おとなたちが子どもを自らのコンプレックスの犠牲にしないように配慮し、自らの親としての「発達課題」を身に引き受けるように心理的に成熟することによって、子どもが自らの可能性を展開できるようなはたらきかけをしていくようになるということなのである。我々が臨床場面で葛藤に苦しむ母親に共感を寄せることができるのは、その葛藤がある意味では人間が生きていくうえに普遍的なものであって、我々もまたその葛藤に苦しむ者の一人であるからに他ならない。

しかしながら、今日の若い母親の抱える葛藤状況は、20年前とは明らかにその質を異にしている。そして今日の母親の抱える葛藤のその質が「発達につまずきのある

子どもたち」の増加につながっている可能性は大きい。そこで今日の文化環境に生きる母親の葛藤について、今少し考察しておきたい。

《価値の多様化と規範の崩壊》

今日の母親に育児を難しくしている最大の理由は、育児が母親にとって一つの価値ではなくなりつつあるということだろう。逆にみれば一昔前までは母親たちに育児が一つの価値であると信じ込ませるための巧妙な共同幻想装置が十分に機能していたといえる。「母親」という言葉に優しさ、献身、自己犠牲といったイメージを思い浮かべない者はいないだろう。一昔前の母親たちは文字通りそのような生き方をしていたといえる。結婚して次々に子どもを生み、家庭を守って家事と育児に明け暮れる。文字通り自分を無にして、全てを子どもや夫に捧げるのが普通の母親の生き方であった。今の若い母親たちからみれば想像を絶するような苛酷な生活が当時の母親たちには強いられていたわけだが、しかし一部の母親たちを別にすれば、昔の母親たちは少くとも育児することに不平不満を表に現わさなかったようにみえる。もちろん、生活は苛酷であり、そこに多くの葛藤があったことはいうまでもない。では、今日以上に苛酷な生活状況にもかかわらず、なぜ昔の母親は育児そのものに不満を感じなかったのだろうか。それはおそらく当時の文化環境では普通の母親は「家事と育児の生活」しか送られなかったからである。そして「誰もがそのようにしか生きられない」という事実を、文化の共同幻想装置は「母親たるものは誰しもそのように生きねばならない」という規範にすりかえることに成功し、その規範の斉一化の力によって、一人一人の母親に「そのように生きるのが自然」と信じ込ませることに成功してきたということなのである。もちろんこの規範は、それ単独で成り立つものではなく、「男は外で仕事を、女は家庭で家事育児を」という家族の役割分担を前提し、母親たちが育児以外のものに興味や関心をむけないように、育児以外の価値が周到に母親たちの目から隠されていなければならなかったし、そのためには何よりもまず生活に余裕がないということが必要であった。

しかしながら、戦後、女性の高学歴化が進み、社会的地位が向上し、男女平等が唱えられ、物質が豊かになり、生活に一定のゆとりが生まれてくると——つまり、かつての文化規範を支えていた諸前提が一つ一つ覆えられていくと——当然ながら文化の規範力は弱められ、価値が多様化していかざるをえない。「なぜ自分だけが育児にあたらねばならないのか」、「育児以外にもっと価値

のあることがあるのではないか」、母親たちがこのような疑問を感じはじめたとき、過去の文化規範はすでにその力を失ないかけていたといえる。今日は、そのような過去の文化的規範が崩れ、いまだ新しい文化規範が確立されていない過渡期であるわけだが、規範が失なわれれば後にくるのは混乱である。その過渡期の混乱ぶりの中から、今日の母親の葛藤が生まれる。

イ 育児に自信のない母親たち

オムツを自分で縫い、タライで洗濯していた昔と違い、今日は紙オムツが日常的に使われる時代である。この例に象徴されるように、育児のありようは昔と今では大きく異なっている。にもかかわらず、多くの若い母親たちの頭の中では「母親のあるべき姿」は意外に旧来通りだという事実がある。それは自分の胸の中に生きる自分の母親イメージが優しく献身的であるということもあるが、今日が過渡期で過去の規範がいまだに生き残っているからでもあろう。それ故、年長者が「今の若い母親は……」と嘆くのを聞くと一方では強く反撥を感じながら、他方ではやはり落ち着かなくなって、「私は自分の母親のように優しい良い母親か」と自問し不安にならざるをえない。しかも周囲に溢れる育児情報の多くは「母親が優しくないと子どもはダメになる」といった強迫的な調子で昔の母親イメージをそのままもちあげていることが多い。

昔の母親は、育児が選択の余地のない「自然」なものであったが故に、育児に自然に傾倒でき、従って事実として優しくなったのだろうが、そのような過去の母親像が我々の幻想の中で必要以上に美化されて、「母親は優しくなければならぬ」という理念にまで高められると、「自分は優しい母親だろうか」という不安が生まれてくる。こうして今日の若い母親たちは旧来通りの「母親のあるべき姿」の理念と、現実の自分の育児の姿とを常に見比べていかざるをえない。今日育児に悩む母親の一つのタイプは、このように頭の中に思い描いた母親像と現実の自分の姿とのずれに悩み一人相撲をとっているというタイプである。自分の育児はこれでよいのかと思ひ悩み、育児書と首っ引きになって、結局は自然なかたちで子どもに傾倒していけない結果になる。とりわけ核家族でしかも他の母親たちとの交流を断たれているようなケースでは、育児に自信がもてないという袋小路から脱け出ることができずに、育児ノイローゼに陥っていくケースがしばしばある。

ロ 自己実現を目指す母親たち

これまで見てきたように、今日の若い母親たちは、一方では旧来型の規範的母親イメージに合致する「優しい

母親であらねばならぬ」という気持を心の片隅にとどめながらも、他方では次のような発言にも無関心ではおれない。すなわち、「私は母親である前に一個の女性である」「私は確かに母親だが、一個の女性として自らの価値を見失いたくない」「赤ちゃんは確かに可愛いが、お金も欲しいし、仕事もやめたくない、スポーツもしたいし、のんびりショッピングもしたい。一日中家の中に閉じ込められて育児だけなどというのは真平だ」。実際、若い母親が自分の周囲を見まわすとき、人は皆各自の価値を生きているように見えることだろう。仕事と育児の両立に悩みながらも仕事に生甲斐を見出している人、育児のかたわら手芸や料理のサークルに首をつこんでいる人、ママさんスポーツに夢中で育児はもっぱらおばあちゃんにまかせる人……それにかつてのクラスメートの中には、独身で通して男性顔負けの仕事をしている人もいる。これはほんの一例であって、昔のように誰もが家庭にあって家事と育児に追われているというのではない。テレビ、週刊紙、婦人雑誌は一方では優しい母親であるべきことを強調しながら、他方では「一個の自立した女性」としての多様な生き方をことあるごとに見せつけている。しかもそれは手の届かないところにあるのではなく、手を伸ばささえすれば手に入りそうに見える。さらに、最近では、もっぱら育児にのみかかわるのは自立した女性の生き方ではないと言わんばかりの発言もしばしば耳にされる。

こうして、他の女性の様々な生き方が気になり、常に「自分はこれでよいのか」と不安に思われてくる。ああもしたい、こうもしたいと思いつつながら、しかし現実にはそれが実現できない不満が今日の若い母親たちを捉えているように思われる。

昔の母親たちは、お手伝いや子守りのいた家庭以外では、日中の育児から逃れることはできなかったし、またそのようなことは思いもつかなかったに相違ない。何しろ育児は他の家事に比べればむしろ唯一の価値であったとさえいえるのだから、他の生き方をあれこれ思案することもなかったわけである。しかし今日は明らかにそうではなく、しようと思えばダイケアに子どもを預けて数時間テニスをしたりショッピングしたりできるのであって、それをするかしないかは各自の選択の問題になりつつある。

もちろん自己価値の実現がいかなる場合にも育児と矛盾するというわけではないだろう。現にうまく両立させている人も多勢いる。しかしながら、ひとたび育児以外の価値が気になりだすと、どうしても育児はつまらなく「シンドイことばかり」に思えてきてしまう。そうする

と、子どもが可愛いという素朴な気持さえ失なわれ、自分の子を突き離して見てしまう結果になって、「それではいけない、可愛がらねば」という気持が生じてきてしまう。子どもへの自然な愛情が「義務としての子育て」になり変ってしまえば、「金銭とひきかえに育児一切を人の手で」というところまではもう一步である。

幸いなことに、例外を除けば今日の状況はそこまではいっていない。しかし育児の価値が低下して「余儀なくしなければならないもの」と感じられるようになってしまえば、結局母親にとって育児はイライラさせるだけのものになってしまうことだろう。それが成長していく子どもにとって好ましくないことは論をまたない。

一見したところ昔の母親たちに比べて今の若い母親たちは随分恵まれた生活条件下に多様な可能性を与えられて生活しているように見える。これは一面の真実にはちがいない。しかしながら他面では、かつてのような誰にも共通する「母親の生き方」が崩壊し、自ら「母親としての生き方」を選びとらねばならなくなった。いろいろな生き方の可能性が与えられた分だけ欲望が膨らみ、膨らんだ欲望は、所詮満たされるわけがないので、その分不満も増加する。こうして、今の若い母親たちは常に満たされないという気分を意識せざるをえない。夫がそのような妻を支えてやればともかく、父親像もまた崩れつつある今日では、夫の父親としての姿も若い母親たちには不満の種となる。あるいはむしろ、夫から支えられていない、精神的に満たされていないという思いが、若い母親たちを自己価値の追求へと駆りたてているのかもしれない。それはともあれ、育児とのかかわりのなかで葛藤をかかえ込むもう一つのタイプは、このような自己価値の実現が育児とのかかわりで阻止される欲求不満のタイプである。

ハ 自分の思い通りに育てたがる母親たち

育児ストレスのもう一つの出所は、今日の若い母親が子どもを自分の思い通りに育てようと強く願うところにもある。もちろんどの時代にあっても親は子どもにいろいろな期待を寄せ、その期待通りに成長することを願ってきたに相違ない。しかしながら、今日の母親のその思いは、これまで述べてきた文化の枠組の変動とも相俟って、異常なまでに強いものになっていることを見ないわけにはいかない。そしてその思いが強すぎれば、結局は親の期待する子ども像と現実の我が子の姿とのくい違いばかり目について、イライラがつのる結果に終わってしまうのである。このような強い母親の思いはどこから出てくるのか。一つには、昔の「子は授けもの」といった觀念が打ち消され、子どもは「つくるもの」になったとい

う時代の変化があるだろう。授かりものである子どもを大切に育てれば、その子に授かった力が自ずと花開く——こう考えるのはいかにも前近代的のようだが、しかしそう考えることによって、昔の親たちはかえってゆとりをもって子どもを眺めることができただろう。これに対して、子どもは産児計画によってつくるものであり、「子どもがどうなるかは親の育児のあり方にかかっている」という考えが母親を支配するようになると、我が子の今の姿はすべて自分の養育の結果だということになり、自分の育児態度、育児の仕方が直接問われることになるだろう。そうならない為には、どうしても子どもには「人並み」にはなってもらわねばならない。能力差を一切否定する悪しき平等主義がこうした考えを裏打ちしていることはいうまでもない。

もう一つは今日の日本が学力(偏差値)至上主義的な競争社会であって、そこに生き残るためには最悪でも「人並み」でなければならないという強迫観念が母親にあるからだろう。それに拍車をかけるように、「何才になれば〇〇ができる」といった類いの育児情報が氾濫している。そのために、母親は子どもの成長をすぐさま「できる——できない」の物差しで測かる結果になり、できなければできるようにするのが当然とばかり子どもにかかわっていくことになってしまう。そうすると、できないことばかり目についてイライラがつるのは当然である。このような「自分の思い通りの子どもに」という子どもへのかかわり方が、マス現象として生起しているのが今日の日本の現状であろう。

《母性本能の神話の崩壊》

このように見てくると、今日の若い母親たちはストレスを抱え込みやすい社会・文化的環境下に投げ出されていることがよくわかる。その意味では、育児不安や様々な葛藤にさいなまれている若い母親たちは時代の犠牲者なのかもしれない。フランスで物議をかもしたバダンテールの「プラス・ラブ」^{註15}が言うように、確かに「母性本能」の神話は崩壊した。筆者は昭和55年度島根県教育委員会社会教育課の家庭教育相談事業に於いて、3才児を長子にもつ県下の母親を対象にしたアンケート調査を行なったが、回答者全体の約30%を占める常勤の母親たちのうち「事情が許せば育児に専念したいか」の問いに「したいと思わない」と答えた者が常勤者全体の11%にもほぼる^{註16}。さらに同事業において県下の母親たちと実際に接触したさいも「自分は子どもを可愛いと思えない、育児に向いていないのではないか」とか「家の中で子どもと二人きりの生活など想像しただけで気が狂い

そうになる」というたぐいの話しをしばしば耳にした。おそらくこの若い母親たちはきわめて自分に卒直で本音を語ってくれているのだろう。たしかに、我々はここに母性本能の神話の崩壊をみる思いがする。従来であれば本音は育児が嫌で投げ出したいと思っても、それをあからさまに言うのははばかられた。というのも、そのように思うことは女性としての価値が厳しく問われる結果になったからである。それが規範のもつ力というものであったわけだが、今日それが弱まって女性が本音を本音として言葉に出せるようになった。それを進歩と呼ぶべきかどうかは今わからない。いずれにしても、絶対的保護を必要として生まれてくる人間の赤ん坊にとって、おとなの養育は誰かがやらねばならない欠かすべからざるものである。誰がやるのか。バダンテールは「母性本能は神話である。実際には育児が苦手な母親が多勢いる。そのような母親がストレスを感じながら行う育児より、育児のプロフェッショナルにまかせる方が子どもにとってどんなによいことか」と語る。神話崩壊後にいきつくところは、結局育児の手間を金銭であがなう生活である。そして母性本能の神話の残り火が一時母親の胸の中でくすぶるときには、場あたりの可愛がり方と数多くの玩具を買い与えることが、そのくすぶりを鎮静させることになるのだろう。

皮肉なことに、このように神話が崩れてみてはじめて、それがいかに多くの糸から巧妙に織り成されていたかがわかる。しかし、母性本能が神話であると勝ち誇ったように語ることにどれほどの意味があるのだろう。母性本能なる神話は確かに崩壊した。それはそのとおりだが、だからといって、子どもは母親を必要としていないとでもいうのだろうか。一部の人たちは「子どもは結構一人でも育つ」とか「子育て」とかを語り、過干渉よりは子どもから距離を置いた方がよほどよいなどと主張している。確かに3才前後から、親離れ、子離れという課題が母子相互に生じてくるが、そのことは子どもが親の愛情(子どもへの傾倒^{註17})を必要としていないことを意味しない。子どもの世話をしたり、相手をしたりしていくことによって、子どもと母親とのあいだにつながりができてくると、子どもの成長する力が母親に伝わってきて、それが母親の喜びとなってくる……そういうことを積み重ねていくなかで、母親は子どもが一個の生命体であることの重みを感じ、子どもを一個の人格として認めていくことを学び、子どもへの信頼感をもつようになる。その信頼感があるからこそ、子どもの幼稚園や保育園での生活を、親は後ろから暖かく見守っていることができるのである。そのような子どもの自立する姿の裏に

は、母親の子どもへの信頼、子どもの母親への信頼があることを忘れてはならない。そのような相互の信頼感がかたちづくられる上に、乳児期の母親の傾倒が必要なのである。ひるがえって考えると、育児することの意味、つまり、そのように母親が人間として成長してゆくという面が、今まで見落とされてきたように思われる。

神経症的な諸症状や言葉の遅れなど、発達に問題を抱えている子どもは年々増加している。発達相談や教育相談で出会う母子のあいだには、きまって直接目には見えない葛藤が潜んでいる。その葛藤を何とかしないことには、いわゆる「主訴」も動かない。実際、母親がその「主訴」は全く医学的治療の対象であると思って小児科か訪ね、そこで異常所見がなく発達相談の方にまわるよう医師にいわれて、我々の所を訪ねてきた場合、つまり母親が子どもの「症状」をあくまでも子どもに内在するものとみなして他動的に教育相談や発達相談をうけにくる場合、その初回面接において何がしかの進展がみられるということはまずない。情況が動きだすのは、母親が母子間の葛藤に目をむけ、その葛藤の根にある自らの欲望の領野に目をむけるようになってからなのである。

相談をうけながらも、実際我々に出来ることは少い。できるのは母親自身が自らの葛藤状況を見つめるようになっていくのを支えることだけである。しかし、我々はそのような臨床の場に立ちあうなかで、子どもは母親によって受けとめられ、支えられ、働きかけられることを必要としていると感じる。この点を踏まえるとき、我々は子どもが発達する場には、そのような母親のあたたか

いかかわりが本質的な部分として含まれていると感じないわけにはいかないのである。

以上、母親の子どもへのかかわりを、母親自身の欲望に根ざしたものと考える視点から、今日の若い母親たちがかかえ込むであろう諸々の葛藤について述べてきた。これまでの議論を反映させるかたちで、母子の関係を図式的に示せば、下図のようになるだろう。^{註18}

II 母子関係記述の諸問題

これまで我々は H・ドイッチェの「Psychology of Women」ならびに筆者の発達相談等での経験をふまえて、乳幼児期の母親の心的葛藤について記述してきた。その際「いらいらした気持」「育児に傾倒していけないという印象」「自分の思い通りに子どもを動かしたがつている」「子どもを基本的に受け入れていない」等々の表現を用いたが、これについては従来の実証主義の枠組の信奉者たちから直ちに主観主義であるという批判が返ってこよう。その批判に十分答えるためには、最近の早期母子関係研究や発達臨床研究をつぶさに検討しなければならぬが、序でも触れたように、それは別の機会にゆずることにして、ここでは臨床場面における母子関係の記述の大枠について簡単にふれるにとどめたい。

1. 母子の生活世界の記述をめざして

《チェックリストによる記述の妥当性》

実証主義の枠組からすれば、「母親のかかわり方の歪

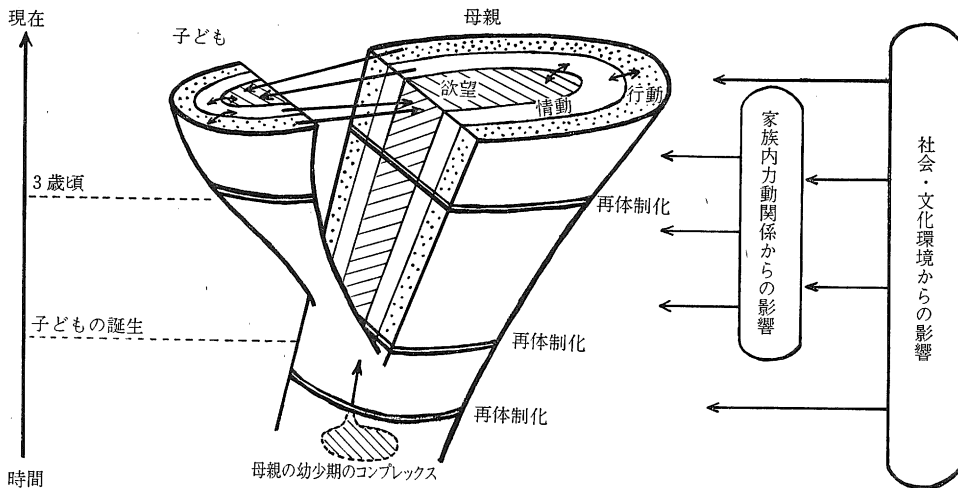


図1 初期の母子関係理解のための略図

み」を語りうるためには、まずもって行動次元でその歪みを実証できるのでなければならない。そこで、典型的な実験パラダイムとして、発達障害児の母親群と普通児の母親群の各被験者（母親）に、あらかじめ統制されたプレイルームで30分間子どもと遊ばせ、その間の状況をビデオに記録することが試みられる。そしてデータ分析にあたっては、まず母親と子どもとのかかわりを、一般にポジティブと思われる行動（子どもの側の愛着行動、欲求表出、母親の行動へのタイミングよい応答、正の情動表出、また母親の側の言葉かけ行動、スキンシップ行動、応答を強要しない働きかけ、タイミングよい応答など）と、ネガティブな行動（子どもの側、母親の側でのタイミングのずれた応答、拒否的行動、負の情動表出など）に分け、それぞれの要素カテゴリーについてその出現頻度を調べるとか、あるいは最近の研究にみられるように、相互作用にもっと具体的にせまる目的で、コミュニケーションの時間的体制¹⁹を分析するなどして、2群間の差異を明らかにしようとする。

しかしながら「おとなから見た子ども、I」でも簡単に触れたように、それぞれのチェック・カテゴリーの設定自体、すでに母子関係のありようについての総合的な判断を含んでいることが銘記されねばならない。つまりそれらのチェック・カテゴリーはその母子の関係行動を全体として捉えていてその点では妥当なものだという総合判断がなければ、そもそもそのチェック・カテゴリーを用いられないはずなのである。妥当だという判断は何によって決まるのか。それは操作的にいえば、その母子関係を目撃していない第三者が、各チェック項目に得られた得点の布置全体からその母子関係を予想記述したものと、その母子関係を見て知っている者の全体記述とが、ほぼ重なり合うことによってであろう。しかしそれにはまず第一に、その母子関係を見てそれを正確に全体記述できる者がいなければならない。第二に、全体としての母子の関係を要素的な行動に分解することができ分解した要素的行動を加算・合成すればその全体が再構成されるという前提に立たねばならない。

残念なことに、行動チェック・リストを用いた研究は数多いにもかかわらず、それがどれほど十全な記述たりえているかという妥当性についての考察——それは結局その関係行動を全体としてどう見るかにかかわる——は、いずれの研究レポートにおいてもまったく顧みられていない。ということは、当の研究者自身は我々が「主観的」に記述したのと同水準の素朴な記述を秘かにこなしていて、それとチェック項目によって記述されるものとの照合によって、これも「主観的」にこれらのカテゴ

リーで妥当だという判断を下している、ということなのだろうか。もしそうだとすれば、問題は全体印象を日常言語でそのまま記述するか、数量的に縮約して記述するか表現上の相異にすぎなくなってしまう。

《日常的なかわりの把握》

次に問題になるのは、設定されたプレイルームでの30分間なら30分間という時間内に現われた行動が、果してその母子の日常的な関係行動を十分に代表しているかという点である。これについても、実証的研究のほとんどはその吟味を十分にしていない。おそらくその反省の上に乗ったことであると思われるが、三宅²⁰は自然な環境下での母子の関係行動を記述しようとしている。しかしこの場合でも、結局収録されるのは設定された一定局面であって、そこに記録されたものがその母子の日常の関係をどれほどよく代表しているかについての吟味は十分でない。

その上、初めてプレイルームに入った母親は一般に居心地の悪さを感じるようで、その居心地の悪さを埋め合せようとしてか、母親は日常的なかわりよりも過剰に子どもに働きかけるきらいがある。²¹それは30分間のプレイの前半をアイドリング期として収録データからはずし、残りの15分のデータを使用すれば済む、という問題ではなさそうである。それゆえ、プレイルームでの行動がどれほど母親の日常的なかわりを反映しているかについては、慎重な吟味が必要である。

さらに、プレイ場面を主に取りあげるという裏には、プレイという場面が母子の関係行動全般を理解するうえで核になるという考えがあると思われるが、果してそう考えてよいだろうか。たとえば筆者は次のような場面を目撃したことがある。プレイ場面では本当に子どもと楽しそうに遊んでいて、この母子の間に葛藤があるのだろうかと思った矢先のこと、その母親が帰り際に「先生にバイバイしなさい」といったのに子どもは応じなかった。その時、その母親はこちらに見えないように子どもの腕をかりあげたのである。遺憾ながら筆者の臨床経験が浅いために、プレイ場面で本当は生じていた歪んだ関係行動が捉えきれなかったのだ、という可能性は確かに残る。しかしもう一つの可能性として、「30分間のプレイ場面でその母親は別に問題となるような子どもへのかわりは示さなかったが、他の場面ではその母親の心的葛藤を露呈するような子どもへのかわりを示した」とも考えられる。後者の可能性を考える時、我々は母親の子どもへの日常的なかわりが、常にプレイの中に反映されるか縮約されて表われるとか簡単に信じてよいだ

ろうか。子どもに痛手となるような母親のかかわり方が出てくるのは、いつも決まって食事場面においてであるとか、学習場面においてである、というようなケースもあるのではないか。確かに、そういう場面を中心に歪んでいる母子の関係がプレイ場面に微妙に反映されることは十分に予想できる。しかしながら、微妙に反映されるだけだとするならば、プレイ場面を中心に考えることにそれほど意味がなくなってしまうことにもなる。それに、チェック・カテゴリーがその微妙な歪みを捉えるだけの検出力をもっているだろうかという疑問も出てくるのである。註22

我々は臨床の問題への実証的アプローチを否定するものではない。しかし今あげたような問題を十分念頭に置くのでなければ、無責任な結論が導かれなともかぎらない。とりわけ臨床的な問題として母子の関係の歪みを見ていく場合にはそうである。プレイ場面のデータだけで、その代表性を全く吟味することなく、二群間に相異のないことをもって「母親のかかわり方に問題はない」という結論が導かれ、そこから、子どもの発達のみならずの原因は心理的なものではなく、おそらくは器質的なもの、たとえば微細脳損傷であろう、などと結論づけていく実証主義的「臨床」研究家の何と多いことか。註23

では、いかにして我々は母親の日常的なかかわりを捉えていけばよいのだろうか。

一つには、観察者が可能なかぎり母子の生活場面に赴くことである。もちろん、生活が営まれている家庭の場に何度も出掛けることはいろいろな意味で難しい。しかし、発達につまずきを持つ子どもとその親が複数で月に一、二度合宿をもつ場とか、夏休みや春休みの療育キャンプの場などに、観察者も生活を共にしながら、特定の母子や父母子のかかわりをみってみるという道は残されているように思われる註24。そこから得られる情報は、統制された場面での数十分間の関係行動から得られる情報よりはるかに豊かで意味がある。実際、プレイ場面では終始硬かった母親の子どもへのかかわりが、生活場面や療育キャンプの場などでは予想外に柔軟であったり、母親面接からは母親の葛藤の出所がいっこうにわからなかったのに、キャンプの日に父親を混じえたその母子の行動から、その母親の葛藤の出所が一挙に洞察できたり、ということが少なからずある。プレイ場面で母親と子どもがどう振舞うかも確かに一つの重要なデータであるが、統制されていない生活場面での子どもの行動や母親の行動は、その母子関係を理解する上でもっと重要ではないだろうか。もう一つ、発達につまずきを抱えた子

もが保育所や幼稚園あるいは学校に通っている場合には、そこでの子どもの様子、つまり保育母や教師へのかかわり、他児へのかかわりを観察することからも、重要な情報が得られるだろう。

確かに、母子のやりとりにおいていかに呼吸がうまく合っているかを分析する、Trevarthen註25に代表されるようなコミュニケーションのマイクロ・アナリシス研究は、臨床的な研究にも十分適用の余地があると思う。しかし、我々としてはまずさしあたり、生活場面での母子のやりとり可能なかぎり立ち合い、たとえどれほどエピソード的であっても、そこで目にとまったものを素朴に記述し、そこから母親の抱える葛藤、家族内にある軋轢、子どもの苦しみを洞察していくべきではないかと考える。

それにしても本節の冒頭で述べたような記述「母親がいらいらしている」「育児に傾倒していないという印象」「子どもを基本的に受け入れていない」という記述は、いったいどこから出てくるのだろうか。

《^{ついで}対の関係と共感性》

前二稿を通して繰り返して述べてきたように、観察者がその母子のかかわりの場面上空飛翔的に眺め、一人の人間としてではなく「透明な眼」として機能するか、あるいは人格をもつ一個の人間としてそこに参与するかは決定的な違いをもつ。これはM・ブーバー註26のいう「我——それ」の関係、「我——汝」の関係に相即する問題である。我々が自らの家庭にあって妻や子どもにかかわるとき、ほとんどの場合、相手の喜び、悲しみ、怒りがごく自然に伝わってくる。相手を理解しようと特に意図したわけでもないのに、相手の気持のありようが伝わってくるのである。

いうまでもなく、臨床に携わる者はこのような「我——汝」の関係において来談者にかかわろうとするのであって、決して「我——それ」の関係において物を見るように来談者を見るのではない。そして、臨床に携わる者と来談者の間に真の意味でのラポールが成立しているときには、ちょうど自分の肉親の気持や心の動きがわかるように、来談者の志向や心の動きが、常にはいわないまでも、多くの場合、自然に伝わってくるのである。(臨床に携わる者がこの決定的に重要な点を忘却して、己れの臨床の対象化をはかるあまり、安易に実証主義的手法に拜跪するのは誠に遺憾なことといわねばならない)。

逆に我々が実証主義精神の権化になって、母親の行動を細分化し測定しようとしたすと、母親の志向や気持はまずつかめなくなってしまう。「おとなから見た子ども I」において、我々は「見る」の様態の記述を行なった

が、そこでの議論はまさに今の議論と重なり合う。この文脈において「母親が子どもの気持をわかる」という問題に触れておこう。

2. 子どもの気持がわかるということ

《他者の志向性とその記述可能性》

実証主義の枠内でいま子どもの行動を記述しようというとき、研究者は子どもを表向きは別宇宙の存在者であるかのように無関与の態度をとって見ようとする。研究者自身を無化することが、その研究者と第三者との位置を、従って客観性を保証する条件だというわけである。従って記述も一人称単数を主語とした能動形でなされるべきでなく、無人称の受動形でなされるべきだとされる。それゆえ記述主体が「子どもは——のように見えた」と記述するのは主観的記述であって、研究のプリミティブな段階では許されても、いずれは客観的な言葉で記述されねばならない。もちろん今の問題は操作的に解決可能である。すなわち、「子どもは——のように見える」という記述を一つの行動記述カテゴリーとして設定し、不特定多数の観察者が当の子どもの行動をそのカテゴリーに入れるならば、先の研究者の記述は公共性、客観性を得たというわけである。

しかし問題なのは、子どものその行動に初めてそのような記述を与えたのはある特定の人間だったという事実である。一人の研究者の目の前でなされた一人の子どもの行動が、その研究者によっていったん記述されると、それによってその行動は一種のアイデア化を被る。つまり、その具体性のなかの中核的（と研究者にみえた）部分だけが記述され、他は抜け落ちていく。この記述を受け取った第三者は、アイデア化された記述の部分しか先の研究者と共有しえない。記述によってアイデア化された部分が子どもの行動を真に捉えておれば問題はないが、しかし捉えられずに抜け落ちる部分に重要なものが少ないのである。

たとえば「その子は手を伸ばしてその積木を掴み、数回振った後で、それを床に落した」という記述があるでしょう。我々はこの記述に対してあるイメージを思い描くことができる。それは自分の身近にいる子どもがかつてやったような行動であるか、あるいは我々が実際そのように振舞ってみたと思定したときのイメージである。しかし、「掴む」という記述は、視覚的に物を捉えていて、目と手と協応させながら手を積木に持って行って掴んだ、という意味なのだろうか、「掴む」という能動形の記述は文字通り子どもの能動性を反映しているのだら

うか、それとも、偶然手が積木に当たったときにそれを刺激として手が握り込まただけだろうか。「振った」という記述も、その物を握って振るといういつもの行動シエマの発現だったのか、それとも腕の偶発的な運動だったのだろうか。そして「床に落した」というのも、意図的に落したのか、それとも掴む力が弱まって落ちてしまったのか。

これは発達臨床にかかわるある研究会で直面した問題である。報告者は当の子どもの志向の読み取りを記述の中に含めるべきではないと考えていたようであるが、筆者は、その行動の真の文脈と、その子どもの意図性、志向性の解明が、その行動記述に欠かせないという認識に立つために、あえて報告者に対して再度そのような見地から確認していかざるを得なかった。

さて、従来の実証主義的な枠組の中では、先の報告者の報告はむしろ客観的であり、筆者が求めるような記述はまさに観察者の主観の部分に当たる。実際子どもの意図性、志向性の部分は、見る者のパースペクティブに強く支配されていて、傍観している第三者にはそれとして気づかれないことが多い。ビデオのような文明の利器によっても判別しかねるのである。つまり、そのような志向性は「我——汝」という対の関係の中で感じ取られるのであって、その対の関係の外側にいる第三者にはある程度了解はできても確証をえないという昏さがいつもつきまとう。だからこそ、行動記述から志向性のようなものははずすべきだという主張がなされるわけである。^{註27}

しかしながら、いま簡単にみたように、「その子は手を伸ばしてその積木を掴み、数回振ったあとでそれを床に落した」というふうに記述される行動には、いくつもの様態を想定しうる。そして先に述べた子どもの志向性、意図性は、そのような行動を成立させる背景であり基盤である。そうした基盤が不明のままでは、その行動の意味もまた不明である。にもかかわらず、今日の発達研究の多くは行動の真の意味に赴くことなく、あるラベルを与えられたものの中に（つまりアイデア化されたものの中に）その行動が収まるかどうかの簡単なチェックだけで事を進行させていくのである。記述主体が無化されては、志向性を含んだ子どもの行動の記述などできようはずがない。ところで、先の報告者は筆者の意図性の質問に対してははっきりと答えることができた。それはなぜだろうか。

いま、誕生後数日の乳児が、母親が舌を突き出すのを見て、思わず舌を突き出すのを我々は第三者として目撃するでしょう。^{註28} 我々はこれをどう理解し、どう記述すればよいだろうか。「その赤ん坊は、母親が舌を突き

出すのを見て自分の舌を突き出した」こう記述するのは普通だし自然なのだが、しかしいくつかの注釈を必要とするようにも思われる。母親が舌を出したのは事実であり、それが赤ん坊の網膜に刺激として送り込まれたことも事実である。しかし赤ん坊がそれを「舌」と認知しているとは考えがたい。まして、その「舌」と「自分の舌」との同一性にこの新生児が気付いているとはなお信じがたい。それゆえ、この赤ん坊の行動はいわゆる模倣ではない。ワロンならば「体位の伝染」とか「体位の受胎」などと呼ぶところだろう。つまり母親の行動が赤ん坊の身体に直接訴えかけ、「認知」を媒介することなく、一つの体位が自然にとられていったというケースである。この種の共鳴的、感応的動作は他にもある。3、4才の幼児がテレビの幼児体操をみながら体を動かすのも、また親しい者同士の間であくびが伝染するのも、ほぼ同様の現象である。そして人の気分もまたこの種の共鳴的、感応的現象であるように思われる。

つまり、「我——汝」の関係、「見る——見られる」の関係がなりたつときには、お互いの個の殻が破れて通底しあうために、相手の気持がこちらにしみ出てきたり、こちらの気持が相手にしみ出ていったりするのである。先の報告者が明確に答えられたのも、自ら子どもにかかわっていて、子どもの志向を十分に捉えていたからに他ならない。

こうして我々は「我——汝」の関係においては、「汝」の位置にいる他者の志向は「我」の位置にいる者にごく自然にわかるということ、換言すれば、「我——汝」という関係性において、我々は他者の志向性を明証的に記述することが原理的に可能であると主張することができるのではないだろうか。

《子どもの気持を読み取れない母親》

本来通底しあっている母子の関係において、母親が子どもの志向を読み取れないという事態はどのようにして生じるのだろうか。先の《母親の子どもへのかかわりを規定しているもの》の節で、すでに我々は、母親の欲望の布置に子どもがびったり取り込まれなかったときに生じる様々な母親の葛藤をみた。それをふまえれば、今の疑問にある程度答えることができる。すなわち、母親の葛藤は通常の母子間にある共生的な「我——汝」の関係構造を損い、その結果、それまでの対の関係の中で生じていた気持や感情の相互的伝播が不可能になるからだ。そして葛藤が対の関係を損わずにはおれないのは、葛藤から生じるネガティブな気分のもとでは一切が、我が子すらも、ネガティブな相貌をもって知覚されるから

である。母親の抱く葛藤の原因は何であれ、母子の関係が歪みはじめる発端は、母親の側から言えば、子どもがネガティブな相貌の下に捉えられたとき（この子は欲しくなかった、産まなければよかった、可愛くないと意識されるときがそれにあたると）であり、子どもの側から言えば、母親をネガティブな相貌の下に捉えたとき、（クライン流に子どもの幻想の言葉でいえば、「受け入れられていない」「可愛がってもらえない」「自分はいけない子だ」と子どもが感じ取るとき）であると思われる。このこと自体はどの母子間にも生じるにちがいないが、一般にそれが母子の関係の歪みにまで進展しないのは、どこかで軌道修正がはかられるからである。母親が自分の欲望を整理しきれずに種々の葛藤をかかえて子どもの方を向いていかなかったとき（つまり対の関係が崩れかけたとき）子どもは通常、自分の置かれている危機的状況を何らかのかたちで表現してくるものである。多くの母親は容易にそれに気付いて「やっぱり私がしっかりしないと」というふうに子どもに傾倒する方向に態度を変えていく。その意味では誰もがその育児の過程で危い綱わりをしているわけだが、母親があまり自分の方を向きすぎて子どもの方を見なさすぎるとか、子どもの側の危機を告げるサインがあまりに弱々しいとかの理由によって、母親が態度を変えていくことができないときには、歪みがどんどん累積されていく。ところが、人間の適応機制はそのような歪んだ関係性の上にも作用を及ぼすから、互いに十分歯車が噛み合わないままに、母子間に日常的な関係パターンができあがり、それがまたステレオタイプ化されていくようになる。我々が臨床の場であつた母子の関係の歪みというのはこのようにして成立してくるものではないだろうか。そして、子どもの内部にたとえば自立へのエネルギーが強まるなどして、これまでのステレオタイプ化された関係パターンをもはや維持できなくなってきたとき、子どもはその危機的状況を「症状」として表現するのではないだろうか。

次のようなケースを考えてみよう。20分間のプレイ場面において一組の母子が遊んでいる。一見したところ母親は一生懸命子どもと遊んでいるようにみえる。盛んに子どもに言葉をかけ、積み木を並べてそこに子どもを誘ったり、お店やさんごっこをしようとして働きかけたりして休むことがない。しかしよく見ると、子どもが遊んでいるのか、母親が遊んでいるのかわからないといった雰囲気があるのに気付く。実際、遊びの新しい局面を切り開くのはほとんどが母親で、子どもはそれに追従しているだけというふうにもみえる。そのように見えてくると、今度は言葉かけも基本的には「あれしなさい、これしなさい」とか「これはなに、なんというの」というように、

単なる命令であったり、一つ答えをいえばそれでコミュニケーションが完結するものであることに気付く。そして、こちらには子どもがつまらなさそうにしていると見えるのに、それには一向おかまいなく、母親は自分の「つもり」の上に子どもをのせようとやっきになって働きかけている……。

先にも触れたように、初回のプレイではこういうことがよく起りやすい。しかし今のケースはもう十数回そのプレイルームでプレイを続けている母子である。通常の生活場面での母子の遊びはこれとは相当ちがっている。就学直前ぐらいの母子の遊びは、普通子どもがいろいろな遊びをしてそこに母親を誘い入れるとか、母親の方が子どもの遊びを支えるかたちで介入するとかいった形態が多い。それをもう少し細かく見ると、母親は子どもの話をじっくり聞いてやって、子どもの考えているところについていこうとしていたり、子どもの誘いかけにのったり、子どものしていることに驚いてみせたり……というように、常に子どもを主役にして自分はもっぱら脇役にまわっている。この点を踏まえるとき、先の母親の子どもへのかかわり方は、なるほど一見一生懸命だけれども、子どもの気持を生かしていないと結論づけてもまず間違いのないと思われる。実際、自己表現力の弱いその子どもが、そのプレイの中で、自分の方から母親に話しかけたことが数度あったが、母親はそれに應對していくどころか、その都度自分の方からの話しかけによってその子どもの話しかけを中断し、結局は自分の思う方向に子どもを動かしていったのである。註²⁹

このケースなどは母親が子どもの気持を読もうとしないう一つの典型例であろう。子どもに対して拒否的というのは、何も子どもを冷たくあしらうとか、子どもが嫌いだとかいうことばかりではない。子どもの志向をいちいち潰していくのも、「自分」というものをいまよりやく外に向かって押し出していこうとしている子どもにとっては、まさに「拒否的」なのである。それゆえ、既製の「親子関係診断テスト」など、母親の意識面をとらえて拒否的か否かをさぐろうとしても真に意味のある結果はまずでてこないだろう。母親の拒否的な態度が行動に反映されてきたとしても、それは今の例のようにきわめて微妙なものであるし、またその内奥の感情に至っては、母親面接や、合宿やキャンプのような場を通して、母親と深いラポールがあるときに、ある局面でわずかに垣間みられるものにすぎないと思われる。

ともあれ、「子どもの志向を母親が読めない」という事態が具体的にどのようなものであるかを、このケースを通して了解できれば、さしあたっては十分である。

最後にもう一つ、プレイの場にプレイセラピストとして加わる何人かの女性を考えてみると、そこに巧拙が大きく出てくるのに気がつく。一般的に言えば、何人かの育児経験のある女性は、育児経験のない女性より子どもへのかかわり方がうまい。それは容易に理解できる場所であるが、同じ独身の若い女性でも、巧拙が大きいのである。

それは、発達心理学を十分学んだとか、臨床場面を数多く経験したとかの関数であるよりは、ほんとうに子ども好きかどうかの関数であるように思われる。もちろんプレイを単なるプレイとしてではなく、治療的意味をもたせてはつきり位置づけていくためには、様々な知識や経験が物を言う。しかし、子どもを主役にしてうまく遊べるかどうか、という点だけにかぎってみると、真に子ども好きな人、共感能力の高い人に軍配があがってしまう。それは結局、子どもが可愛くて仕方がない人には子どもの気持が容易にわかり、子どもの志向についていくことができるということであろう。そこから考えれば、母親が自分の子どもを本当に可愛いと思うことができれば、その母子関係は多少の曲折はあってもまず問題なく維持されていくといえるのではないだろうか。

このように考えてくると、さしあたり我々は、母親がまずもって自分の葛藤のもつれた糸を解きほぐし、それによって子どもを真に受容できるようになることが、母子の関係が修復されるうえに欠かせない、とひとまず結論づけることができる。

* * *

「おとなとの関係の中の子ども」というパースペクティブに導かれながら、本稿では、子どもにかかわる重要な他者 (significant other) としての母親が育児の過程で様々な葛藤を抱えることを見たのち、そのような母子関係を記述していく上で問題となる点をいくつかとりあげて論じた。序でも触れたように、これは他の機会に予定している最近の母子関係研究、発達障害児の臨床研究に対する批判的検討の予備考察に当たることを附記して、この小論を終る。

註ならびに参考文献

註1 島根大学教育学部紀要第13巻 昭和54年、同第15巻、昭和56年

註2 Bulletin de psychologie n° 236 tome XVIII
3-6

註3 たとえば Bower, T. G. R “Human Development” Freeman 1979 参照

註4 このような見地は最近のライフサイクル研究にもみられる。たとえば小此本編『講座家族精神医学』第3巻、「ライフサイクルと家族の病理」p.1~43.を参照。

註5 子どもの発達を「先取り」と「やりなおし」の力動過程と考える一人にワロンがいる。たとえば「子どもの精神発達」(竹内訳, 人文書院1982)を参照。

註6 H. Deutsch “Psychology of Women” 1945. 邦訳『母親の心理』を参照。

註7 Hegel『法哲学批判』岩波文庫。

註8 註4の参考文献参照。

註9 M. Klein, “Envy and Gratitude” 1957 (邦訳『羨望と感謝』みすず書房) 参照。なお本論からやや離れるが、同書ならびにスィーガル著『メラニー・クライン入門』(岩崎学術出版)によりながら、クラインの考えを簡単にみておこう。

クライイによれば、生の本能と死の本能が投射の機制によって、たとえば乳房に投射されることによって、同じ乳房が理想的な乳房と迫害する乳房に分裂する。自らの漠然とした不安が外的対象に投影されて、その外的対象が自らを迫害すると感じるの^{パラノイド}はまさに妄想^パ的であるが、メラニー・クラインはこれを妄想一分裂態勢 (paranoid splitting position) とよび、乳児の最初段階の特徴とみなす。そして母子間の情況が好ましかれば、妄想恐怖は減少し、理想的な良い乳房が自らに生命と安全を保証してくれると感じることができる。こうして、分裂した外的対象の統合化が進み、自我の統合化も進むという。他方情況が好ましくなれば、妄想的恐怖は昂進し、それがあまりにも強い場合には迫害するものを全面的に否認する結果になる。こうして結局は自らの生命と安全が危険にさらされていると感じて、ひきこもる結果になるという。

一般には、この妄想一分裂態勢は、分裂した対象の統合化というかたちでのりこえられていく。良い対象、悪い対象の2つがあるのではなく、それは同一対象の二つの側面なのだということが子どもに理解されるようになっていく。つまり、それまで良い乳房、悪い乳房というかたちで部分対象として捉えられていた母親は、いまや母親の全体性として認知され、しかも良い母親と悪い母親がいるのではなく、それらはみな同一の母親の側面なのだということが理解されるようになっていく。それと同時

に、良い対象、悪い対象をとり入れることによって成立していた《理想的自我といけない自我の分裂》ものりこえられ、同じ一人の母親を愛したり憎んだりするのはこの同じ一人の人間、つまり自分だという認識が芽生えてくる。こうしてメラニー・クラインによれば、この時期子どもは自分自身の両価性に直面して、そこから不安が生じてくる。自らの内から生じる破壊衝動は自分の依存対象を破壊してしまった、あるいは破壊してしまうのではないかとこの不安を導くというのである。言いかえれば、フロイトのいう口唇サディズム期の破壊衝動によって子どもは良い対象を失い、それを破壊してしまったと感じ、そこから罪悪感、抑うつ感が生じる一方、外的対象としての母親を破壊することによって、幻想の中のつまり内的対象としての母親をも破壊してしまったと感じる。その結果、その内的対象としての母親への同一化によって成り立っている自己の内的世界をも同時に破壊されたと感じ、そこから絶望感が生まれてくるという。このような抑うつ感、絶望感に対抗して、子どもは失った(破壊された)対象をもと通りに修復して再び自分のものにしようと願う。つまり償いたいという気持ちが生じる。これが妄想一分裂態勢にひき続くものとしての抑うつ態勢に他ならない。この抑うつ態勢は、自らの破壊性と償いたい気持ちとの戦いとして特徴づけられるが、この償いによって抑うつ的な不安が解消していくと考える。ウィニコット流に言い換えれば、子どもがかんしゃくをおこして破壊衝動を母親にぶつけ、母親を「抹殺」しても、再び母親が子どもの前に優しい母親として現われ、子どもを可愛がってくれるならば、子どもは母親が生きながらえていること(完全に破壊し尽されなかったこと)に気づき、不安からたちなおることができるのである。

このようにクラインは、乳児の世界を生と死の二つの本能と、投射、とり入れ、投射による同一化、取り入れ同一化という基本的機制の用語によりながら記述してみせる。クラインの所説が臨床士のような価値をもつのか筆者には明らかでないし、またその所説はあまりに難解すぎて不明な部分も少くない。しかしながら、本稿で述べたような悪循環を、母親の欲望の挫折や母親のコンプレックスが母親の情動や行動を揺り動かし、それが微妙に子どもの幻想界にはねかえって子どもの行動へと結晶化していくというふうに考えるとき、クラインやウィニコットの学説が教えるところは少くないように思われる。

註10 Winnicott, D. W. "The Maturation Processes and the Facilitating Environment" Hogarth Press 1965. 邦訳『情緒発達と精神分析理論』岩崎学術出版 1977年。

註11 Erikson, H. 「幼児期と社会, 1, 2」みすず書房 1977年。

註12 Bateson, G, Jackson, D. D., Haley, J and Weakland, J. H. Toward a theory of schizophrenia Behavioral Science 1. 251-264.

註13 Freud, S. 「ある5才男児の恐怖症分析」フロイト選集第16巻 日本教文社, 昭和44年。

註14 Mannoni, M. "L'enfant, sa 《maladie》 et les autres" 1965. 邦訳『症状と言葉』ミネルヴァ書房 1977年。

註15 Badinter, E. "L'amour en plus—histoire de l'amour maternel, XVII^e-XX^e siècle" 1980.

邦訳『プラス・ラブ』サンリオ出版1981年。

註16 『育児通信』島根県教育委員会社会教育課発行, 昭和56年。

註17 傾倒 (preoccupation) というウィニコットの概念は、乳児期初期の母親が抱いたり、あやしたり、相手になったりという育児に没頭し没入していく様を一語で言いあらわしたものである。母親のその後のかかわりは、子どもの成長と共に文字通りの傾倒から、気持は子どもの方に寄せ、子どもの気持をしっかり受けとめながら、子どものすることを後から見守るようなかかわり方へと変化していく。それ故、3, 4才頃の母親の前向きのかかわりを「傾倒」というと誤解を招きかねないが、本稿では母親のそのような前向きの姿勢を表現するために比喩的な意味で「傾倒」という用語を用いる。

註18 図の説明。発達初期の母子融合情況、つまり心的に通底しあう関係は、どれほどコミュニケーションの同期性を詳細に語っても、《分離・孤立した個と個の相互作用》という観点からは記述しきれない。それゆえ我々は母子の融合性を何らかの形で捉えなければならぬ。しかし他方、母子関係は常に融合的であるわけではなく、母親の願いと子どもの欲望が対峙する場合を不可避免的に含む。このように、母子関係は本質的にアビバレントな関係であるわけだが、このアンビバレントな関係、つまり通底しあいつつ対峙するという関係を中心において示そうとしたのが本図である。

本文で述べたように、母親は個としての発達の過程で何度か心的な再体制化を経験するだろう。その

際、場合によっては幼少期の心的複合を未解決のままに持ち越すということも起ってくる。こうして子どもの誕生を迎えることになるが、母親の欲望や願望は（それが意識されようとされまいと）、母親の情動系を揺り動かし、今度はそれが子どもへの具体的なかかわり（行動）へとはねかえっていく。このような母親の情動や行動は、子どもの欲望の系のフィルターを通して子どもの内部に取り込まれ、意味付けられて、子どもの情動系を揺り動かし行動へと反響していく。その子どもの情動や行動は再び母親の欲望のフィルターを介して……というふうにして循環していくのである。

このような母子の「いま」と「ここ」の関係は、図の矢印の関係として表示される。

他方、母子関係は「いま」と「ここ」の関係に解消されないし、ましてや行動水準の相互作用に解消されないことは言うまでもない。母親と子どもは互いにそれまでの個体史を自らの人格の内に沈澱させている。両者の関係は、それゆえ、そのような個体史の沈澱を内に抱えた人格と人格の関係である。この側面を表示するために、互いの「人格」を《再体制化を含む一つの層》として図示してみた。さらにこの母子の関係に対して、家族内の力動関係、その母子の生きる社会・文化環境が無視できない影響を及ぼしている点は、本文で述べたとおりである。

註19 Fogel, A. Temporal organization in mother-infant face to face interaction, In "Studies in Mother-Infant Interaction" Schaffer, H. R (ed) Academic Press 1977.

註20 Miyake, et al. A study on parent-child relationships and child development from ecopsychological standpoint. Annual Report of Research and Clinical Center For Child Development. Hokkaido Univ. 1977-1978, 1980-1981.

註21 研究者は、データ収録場面での母親の行動は知っていても、母親が日常どのように子どもにかかわっているかについては意外に知らないことが多い。子どもについても同様で、特定の課題場面で子どもがどう振舞うかについては自らの研究を通して知っているにしても、その子の生活世界について全体的イメージをもっている研究者が意外に少ないことには驚かされる。我々が子どもの生活世界への還帰を強調するのも、そういう事情があるからである。

註22 それに加えて、観察者がビデオの画面の中で展開

される行動をチェック・カテゴリーにひろいあげていく作業にも主観といえば主観が入り込む。一連の行動をどこで区切ってどのカテゴリーに入れるかは、結局はその観察者が行動の流れを全体としてどう読むかにかかってくるのである。

註23 我々は母親のかかわり方に問題があることを明示できたからといって、直ちにそれを子どもをつまづきの原因と考えているわけではない。我々は病因解明という観点から母子の関係性を考えているわけではないのである。病因論は症状形成の機制が明示されるまでは常に推測の域を出ない。それ故逆に、母親の「客観的な心理学的検査」によって、そこに問題を見出せなかったからといって、その症状の原因は器質的なものだろう、という推論もきわめてずさんなものである。母親の子どもの受容という問題は決して行動レベルだけで判断しうるものではないのである。臨床家と称する人が、質問紙による親子関係診断テストの結果をそのまま信じて「データが危険帯に入っていないから、母親の子どもへのかかわりに問題はない」などというのは、己れの臨床の唾棄に等しい。

註24 全国にある「ことばの教室」ではそのほとんどにおいてこのような努力がなされており、そのような教師群に謙虚に学ぶ必要がある。たとえば、中島、川野編著『みんなまってくれ』アカデミア出版1981年を参照。

註25 Sylvester-Bradley & Trevarthen, C. Baby talk as an adaptation to the infants communication. In “The Development of Communication” Waterson, N. & Snow, C (ed) 1978. さらに Kaye, K. Toward the origin of dialogue, In “Studies in Mother-Infant Interaction”. Schaffer, H. R. (ed) Academic Press 1977. などを参照。

註26 Buber, M. “Ich und Du” 1923 邦訳『我と汝』ブーバ著作集第1巻『対話の原理』所収 みすず書房1967年。

註27 もっとも、ごく最近になって早期母子関係研究にかかわる研究者たちのアプローチのなかに筆者の観点到に近いものが現われてきている。たとえば、参加する観察者 (participant observer) とか、間主観的アプローチを語る Newson, J の2つの論文。An intersubjective Approach to the semantic description of mother-infant interaction, In “Studies in Mother-Infant Interaction “Schaf-

fer, H. R. (ed) および Dialogue and development : an intersubjective approach. In “Action, Gesture and Symbol” Lock, A (ed) Academic press 1978.

さらには相互主観性、記述分析について語る Trevarthen, C の論文。Secondary intersubjectivity, In “Action Gesture and Symbol” Lock, A (ed) Academic Press 1978. および Descriptive behavior, In “Studies in Mother-Infant Interaction” Schaffer, H. R. (ed) Academic press 1977 が興味深い。

註28 Bower, T. G. R. “Human Development” Freeman 1979. 邦訳『ヒューマン・ディベロプメント』ミネルヴァ書房 p.384 の写真を参照。

註29 興味深いことに、このプレイ場面の母親の行動を「ことばかけの頻度」「相互作用の頻度」というラフなカテゴリーによって分析すると、きわめてポジティブな結果がでてくる。これに対して、誰がイニシアチブをとり誰がそれに追従したのか、という観点からその20分間のかかわりを分析してみると、圧倒的に母親がイニシアチブをとっていることが示された。この事実はカテゴリーの設定次第で結果の表現が正反対になりうることを示していると共に、そのカテゴリーの設定が結局はどのようなパースペクティブからみるかにかかっていることを明示している。